

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：34325

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13121

研究課題名（和文）日本とアメリカにおける昔話の絵本化に関する比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Picture Book Adaptation of Folktales in Japan and the U.S.

研究代表者

柿本 真代（Kakimoto, Mayo）

京都華頂大学・現代家政学部現代家政学科・准教授

研究者番号：40759081

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：今日、昔話は絵本を介して子どもたちに伝えられることが多いが、中でもディズニーによる再話は日本の昔話絵本の表現や物語理解に大きな影響を与えている。本研究では、日本における昔話の伝承や絵本がディズニー作品の流入によってどのように変容したのかを解明することを目的に、アメリカでの映画の公開と絵本化、日本での映画の公開と絵本の展開、日本におけるディズニー絵本に関する評価について分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまで映画の副産物として看過されてきたディズニー絵本を、学術研究の俎上に載せることに分野開拓的な意義がある。また、絵本史や児童文化史に対する貢献はもちろんのこと、絵本を日常的に子どもたちと読む保育や幼児教育の現場でも本研究の成果が活用可能である。今日子どもとそのメディアの規制については盛んに議論されるが、本研究は昔話とその表現の変遷を実証的に捉えなおしたもので、こうした議論を検討する一助として大きな社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：Today, folktales are often passed on to children through picture books, and among these, retellings by Disney have had a significant impact on the representation and story understanding of Japanese folktale picture books. With the aim of elucidating how the transmission of folktales and picture books in Japan has been transformed by the influx of Disney productions, this study analyzed (1) the release of movies and picture book adaptations in the United States, (2) the release of movies and the development of picture books in Japan, and (3) evaluations of Disney picture books in Japan.

研究分野：児童文学史

キーワード：昔話 絵本 再話 ディズニー 映画

1. 研究開始当初の背景

昔話は語りによって伝承されてきたが、近年は絵本やアニメによって子どもたちへ伝えられることが多く、中でもディズニーによる再話によく知られている。ウォルト・ディズニー社は、『白雪姫』や『シンデレラ』などで知られるように、昔話や童話を原作として数々のアニメーション映画を制作し世界中で人気を博してきた。これらの作品は日本においても VHS や絵本、DVD などを通して繰り返し鑑賞されることで、多くの人々の昔話に対する認識を変容させてきた。例えば、児童文学論を受講する学生の多くが「ピノキオ」や「バンビ」の原作者をウォルト・ディズニーだと考えていたとの報告や、グリム童話を原作とする「白雪姫」について、幼児教育系・心理学系の学生の大部分が白雪姫の殺害方法やお妃の死に方などについてグリム版ではなくディズニー版の知識を持っていたという調査結果がある。

また、申請者が「白雪姫」の絵本について予備的調査を行ったところ、「グリム原作」と明記しながらも、ディズニーの創作したエピソードを描いた絵本が散見された。こうした例にみられるように、現在日本における昔話絵本は、ディズニー作品から強い影響を受けており、ディズニーの再話がまるで「正典」かのように受け止められている。しかし、日本における昔話絵本がなぜこのようにディズニー版に強い影響を受けてきたのか、そもそも日本においてディズニー作品はどのように受容されてきたのかについては、十分に明らかになっていない。

ディズニーによる再話に関する研究がなされてこなかったわけではなく、むしろ再話と原作とを比較する研究は数多くなされ、批判も多く寄せられてきた。ディズニーはアメリカの社会状況を反映しながら「アメリカの民話」として昔話や童話を再話してきたが、こうした再話はあまりにアメリカ的かつ教育的で、原作の背景や面白さを損なう「改悪」であるという児童文学研究者からの批判や、特にディズニー・プリンセスと呼ばれる女性主人公たちの描かれ方が、受動的かつ保守的に過ぎるといったジェンダー研究の立場からの批判などである。しかし、どのような立場からの研究にせよ、これまでの研究は映像と原作の比較にとどまっており、ディズニー絵本を介した物語受容の問題について本格的に扱った研究は極めて少ない。

ところが、ディズニーによる再話の受容の問題を考えると、絵本を介した受容は極めて重要である。なぜならば、戦前から占領期にかけてのディズニー作品の受容に関する予備調査によれば、『白雪姫』(1937 米公開)などの長編アニメーションは、日本では映画公開(1950)よりも先に漫画や映画雑誌の記事、そして絵本によってその内容が紹介されていたからである。さらに、映画が多くの子どもたちにとって一度しか鑑賞し得なかったのに対し、絵本の場合は家庭や学校などで繰り返し鑑賞することが可能だったことを考えると、ディズニー絵本が日本の昔話絵本に与えた影響は看過できない。

2. 研究の目的

本研究では、日本における昔話絵本がディズニー作品の影響をどのように受けてきたのかを歴史的な脈の中で検討しなおすことを目的に、ディズニー流入期に立ち返り、それぞれの作品がどのように翻訳され、絵本化されたのかを明らかにする。具体的には、

- (1) アメリカでの映画の公開と絵本化
- (2) 日本での映画の公開と絵本の展開
- (3) 日本におけるディズニー絵本に関する評価

を分析することによって、日本におけるグリム童話などの外国昔話の絵本が、ディズニーの影響を受けて変容していく過程と、その社会的評価を通史的に描き出すことを目的とする。

3. 研究の方法

まずアメリカではディズニー映画がどのように絵本化されていたのか、またそれらはどのように評価されていたのかについて明らかにすべく、ディズニー社のアーカイブコレクションやサイモン&シュスター(Simon & Schuster)社など絵本を発行していた出版社の社史ならびにアメリカで発行されていたディズニー絵本を収集する。またそれらがどのように評価されてきたのかを、アメリカの児童書書評雑誌『ホーン・ブック』(Horn Book)などの記事から分析する。

次に、日本ではディズニー作品がどのように受容されていったのかを明らかにする。時代区分はディズニーとの著作権契約の状況に基づき、() 1930 年代～戦前、() 占領期～講談社による著作権独占(1964)と区分する。また著作権を取得した公式のものだけでなく、海賊版も含め、おもに国際子ども図書館と白百合女子大学児童文化研究センターの史料を対象に調査・収集を行う。さらに収集したアメリカのディズニー絵本との比較・対照を行うことで、日本における翻訳の特色や変化を具体的に明らかにする。

アメリカにおける評価の変遷や論争の内容を踏まえ、日本でのディズニー作品に対する評価

はどのように変化したかを分析する。アメリカでは教育者と図書館員の対立であったことから、『日本児童文学』『国民教育』『キネマ旬報』など複数の雑誌の言説を分析することで、図書館員、教育者や映画関係者など、様々な立場からの評価とその変遷を明らかにするとともに、で分析した日本でのディズニー絵本の内容や出版点数と評価の関係についても照らし合わせる。

4. 研究成果

(1) アメリカでの映画の公開と絵本化

本研究の実施期間は大部分が新型コロナウイルスの流行期にあたり、さらにその後の急激な円安の進行および現地治安の悪化によって、アメリカでの現地調査を断念せざるを得なかった。そのため日本国内の調査機関の開拓ならびにアメリカの研究機関からの文献収集や書籍の取り寄せを行った。

その結果、アメリカ本国においても、ディズニー映画の公開に先立って物語が女性雑誌や漫画雑誌、絵本によって公開されていたことがわかった。さらに、ディズニー・スタジオでは複数のストーリー案が出されていたこともあり、雑誌記事や絵本では、映画と異なる描写が散見されることが明らかになった。

また、ミッキー・マウスのもも含め、ディズニー関係の書籍については1930年代にウェスタン(Western)社があらゆる書籍に関するキャラクターライセンス契約をしたことがわかった。ウェスタン社はさらに、漫画についてはデル(Dell)社、絵本に関してはサイモン&シュスター社と契約し、それぞれが手掛けることになったという経緯も判明した。

(2) 日本での映画の公開と絵本の展開

アメリカでは1940年代にサイモン&シュスター社のリトル・ゴールデン・ブックス(Little Golden Books)シリーズの絵本として、次々とディズニー絵本が刊行されるようになった。一方で日本においては、昔話をもとにした長編アニメーションについては太平洋戦争中であったため公開は10年以上遅れた。しかし映画雑誌などでそのストーリーについては紹介されており、公式のものではないものの類似するストーリーの絵本も発行されていた。

戦後になると、GHQによる入札が行われ、公式のディズニー映画の絵本、サイモン&シュスター社のリトル・ゴールデン・ブックスシリーズの1冊が翻訳・刊行されることになったほか、1950年代には講談社からもディズニー絵本が刊行された。講談社ではサイモン&シュスター社のリトル・ゴールデン・ブックスシリーズのほか、グロセット&ダンロップ(Grosset & Dunlap)社のものも翻訳・刊行されている。新潮社からもディズニー絵本が刊行されるようになるが、こちらはサイモン&シュスター社のビッグ・ゴールデン・ブックス(Big Golden Books)シリーズのほか、ランダムハウス(Random House)社のものの翻訳も含まれていた。小学館もディズニー絵本を手掛けるようになったが、こちらもビッグ・ゴールデン・ブックスシリーズの翻訳であった。しかし村岡花子や巽聖歌などを訳者として起用したほか、ディズニー版の脚色についても言及されるなど特色がみられた。

このように、戦後まもなくから1960年代初頭までは多様なディズニー絵本が刊行されていたものの、1960年代に講談社によって著作権が独占され、以降は、絵本は講談社、漫画はリーダーズ・ダイジェスト社の『ディズニーの国』に統一されることになった。

(3) 日本におけるディズニー絵本に関する評価

アメリカでは1960年代なかばまでは、ディズニー映画を「教育的」とみなす傾向にあったが、こうした傾向にセイヤーズが『ホーン・ブック』誌面上で異議を表明し、以後10年間論争となった。日本でも1967年にはこのセイヤーズの主張が紹介され、やはり1960年代なかばごろからディズニー絵本に対して否定的な見解が『こどものとも』編集者の松居直らによって示されていくようになる。しかし批判の対象となっているディズニー絵本は、セル画をもとにしたとみられる講談社版のもので、滑川道夫はそれ以前のリトル・ゴールデン・ブックスをもとにしたディズニー絵本にはむしろ好意的な意見を表明していたことが明らかになった。本項目については十分に調査がおよばなかったが、松居直が多数の昔話絵本を刊行していくことを考えれば、ディズニー絵本のアンチテーゼとして福音館書店の昔話絵本を捉えなおすことができる可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 柿本真代・山田実咲	4. 巻 66
2. 論文標題 絵本にみる母親像・父親像とその変容：翻訳絵本と比較して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柿本真代	4. 巻 68
2. 論文標題 近代日本におけるキリスト教児童文学の受容：Peep of Dayシリーズの翻訳をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 キリスト教社会問題研究	6. 最初と最後の頁 61-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柿本真代	4. 巻 68
2. 論文標題 戦後日本におけるディズニー絵本の受容	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 京都華頂大学・華頂短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柿本真代
2. 発表標題 キリスト教伝道と明治期の子どもの読み物：キリスト教児童文学の受容と変容
3. 学会等名 2021年度明治学院大学キリスト教研究所一日研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------